岷江入楚

総角

三十五

和書門
類 二〇六三〇 號 廿九 函 廿五 架 五五 冊

内閣文庫
和書 類 二〇六三〇 號 五五 冊 二〇三 函 五 架

内閣文庫
番號 和 20630
冊數 55 (38)
函號 203 25

Kodak Gray Scale
© Kodak, 2007 TM: Kodak
colorchecker
x-rite

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

林氏藏書
日本政府圖書

横笛

字九箇　並居二箇

二月相子信之明て一周忌亡家讀經御

誦經繪事

来薩院献笛聖光於入道家より

源氏見之家御返事の繪より

為君揮笛繪事

林大将訪一条家繪より

御息所對面事

淺草文庫

大殿へ和歌給ふ事
女三宮入道絵事
賜物節の事
大殿帰御殿於人々遣事の
節の事
大殿若君見せ女君服立給ふの
大将為柏木猶依涌泉寺事の
大殿参六条院絵の
三宮之御方にて白家に

三宮之家より給ふや紫上の歌
見て侍りけり
大殿若君抱之宮女房に給ふ事
大将参見君君思出遣事
大殿参六条院御息所へ参宮御方へ事
文遣御節事の

横笛 書くん 以下秘詞 こハ只笛トバカリ在之

ハ
よこ笛のよくいとにくしねは

しるしく成し祝をつきせね

花
源氏の巻河ヽおなじ二歳迄

秘
源氏の巻の才二月まての事あり 柏木

巻ハ巻八才の時まての事

薫ニ一巻句兵部卿ニ巻ありとしるす 奇

[illegible]
横笛常の笛也 趣して わきしかとハ

ゆえといふ 簫 笙 篳篥 清[illegible]

図
此常月の節ハ横にてあれや
節ハ澹（ニキ）や スカス スヽグ ノゾク 悪気を除くへし

故権大納言なくなりし世に有し
ありし様
此
柳原苑すゑの葉見えけり
関
柳原羅道の書をよめり 故の字
照国の作より出そりかりも成るる
地といふ事として聞し
義
大納言して限りて権大納言の孫の
本ハ権ミ苑州ありし
大納言につきてこれ

秘 源は大かたの心をさへかくしくらく
このまふはしのかゝりし御事にて柏木の
事は一しほかなしかりし
いはれ（口清）るやかなしからん
秘 箋 女三宮の御かたの
女三の宮一しほそさひてあはれ
源氏との御事より天下のとかめを
思ふさへいかなしく
求大辰者不謹（キンセ）小瑕（カコ）

湖 はそれにして
秘 今年二月一周忌なり
花 去年の二月出家翌年去今年一周
是とは家隆今昨理随経於
まりもさすかに伊行
秘 薫二歳や
湖 此山のうらりてひさしおきて
秘 わらはの為し
箋湖河 薫の為よ柏木の遺言を別によ

せうそこや
こゝろ西あるとかへん
河 李部王記天慶十年六月十九日御八
講結願 太皇太后御仏殿 故従二位事八講
参入于時多講也金銀瑠璃紺布百端
南侍所金百両銅瑠璃壺一口小蒔草
委事見河海
ねとりにこゝろもとまりて
秘 又ねとり 箏はさうのことのものゝねを夢にても

さうのねのや 秘説伝法の下心
とゞめて此説甚秘也とりふと
大概見ゆ
養 夕霧へとりもてとりぬもの夕霧と
一条の宮諸も
落葉の宮を夕霧の給ひにこゝろをかけし
ことわり侍る 紅梅大臣以下や
ねとりとへも
秘 中将は按察大臣

秘
うへハ藤原家の母をいふ也
後ハ太后同しく所見
外戚の義をいふへし　一条家の事に
明らかす摂家の事とも書也けり
道のまふもと父母の恩を懐ふ也
秘
かさねても世のかくれ
なきあとゝも摂家のかくれとも
さもなく父母のかけハいつまても
了すとく

山みちハ二家もなく
秘
末孫流の御かはりて　二家ハ藤原家にて
〈道の家も
秘
めこの家や
此世をかくうきや海と
末孫流の後世のつとめなりとゝ
かくとや
かくしみちとこそ
秘
めこも居りかりまへかや　義孝

関
同し道との事也とそ
めてたきけるか 弟にたるか 左例
義
めてたき事なりてありし御しは尤
かくれ山里にはる事はえしおは
めや今は世をとそしらさまり
引したるへし

遊第来翻鳴鳳管 盤桓繞黙外龍文 朗詠
鶴翔上山 看第出林遅 留曲文集
大字日紀日 延長六年亭子院にて

はるかにして春日より遣しける御使
よし梅かい移りのたかうなさしあけ
羽
冷泉院へたかうなたてまつらせ給
とてよませ給ひける
花山院御製
世中にふるかひもなき竹の子は
わかへん年をたてまつるかな
御返し
冷泉院御製
年へぬる竹のよはひをかへしても

みれよとかくかきんとてわまし
山り法しあところ
（ゆ）春りのゝ海らけりけりよきれし
て何けりめよりの御くり何り
けりとそ其御すゝそと思ひ
られは世先はりさとい人られは
賀朝法師　延長定額御導師
春の世にこゝろもとなしすわは
ゆかりぬつりそてらや天

遊し　まへしに
春の世に俳つくしもかへかの
また不世の人のよあまは
うしてり
（秘心）流わるのろしにつきまするかり　舞
春の世や（また）りは家もさも人しられ
（舞）ろの来より笛もまへつきされ
（朱雀）世とゆれ今なんにはとくゆかとも
内しところときみしろ御ん

此家ハすてよき海をへまて此身を出べ
あはれ也給ふとしれ共とても
後世の一大事ハのちの世は浄土
のまれとおもひしところとは後
世善根や
へだて道に六道父子兄弟の親之
おもひ一所ハ極楽のうの
世をたのむハ此世をとさめや今ハ名に
出離の御事しらで人も女人ハ菩薩より

ともえしさかりし御身の一言
ちるよて一佛とへ生れましとや
西方に海もひくは互に生れ
ましま門下へ生れくにひけり
あんなの佛と思ひしてハあるまじ
きゆへと
いとゝたらきよしなん
地蔵菩薩経云父子至親岐路各別縦然
相逢無肯代受

秘
河海は地花なれはゆゑとしあらめす
花は仏花の醍醐醍への心はい
さるまふは細し 哥
これもうすれたるといひの心よつ細し
らいしともと 哥 私秘にアリ
河
罍子 又欄子 和人 罍子曰上
罍 音雷 又作鐳 玉罍 也俗塵
たゝ川きのすゝみてよろかけ
のみさとあふのけうる風なるもや

ときはもとれてまつるは内は宗源
木はいふなり螺杯にて菓子などと
へらるゝや内花祭の納しける金
罍とあるは酒器やさはいと訓し礼
記にも山罍其形畫容一能剖而
書に雲雷の形や
韓詩云 天子以玉飾 諸侯大夫皆以黄
金木以掃是は皆器や彫刻模様
秘
菓なとゝへるを内は河海より見てもか

葉 蟲干や河原ニ有みやらいしの非又と
みの丸綴題綴とこ
茶のみすゝめ
葉 不及ゆ字
秘 米藤流ノ法かうの詞けんよ書の也い
こすみも毎とくしつれとかある
いさうしつきや
れうし不の法ともすい
せよしもとれある法字のめて

もし里ことはなれと
葉 前の字佛法はらしとある為さ
せんとてくつけ里
秘 もし里ことゝれとかりつき
詞とて
これさへをうるゝをるゝ後し
源のころやそろひうと流続て
米藤流のいわしめきとならすう
らんとお陣と一しきれは同し

すのはなうたひもゆるしかへしともや
これ八まゐる
秘
かく語りてかきそこなひまうし候や
義
きそこなひくれ候としまいりと
やさしけるにけはれしいらよ
はれて御しきさや
花
入道家の御遊ての書をしまうか
かりと流源の御流すりとや
返歌と云
うき世ゝのわかねところ八ゆくして

そもそも山路も思ひいそらしき
何れ
世中にあるねすもえてしらか
としくくよそのうらくるさん
義
年秘 義 落月は寺
朱雀のかこまひまつ山路八をつかへ
此寺とも昔西向く
しろめくくなる御寺さしよ
義
はや糸流をとられとのかまふれゆる
とかり

けふハねふりとめ給へるに
（桃）六条院ときこえ給ひしにぞ
みかとて　弁　源氏の六西月かりとし
ほかハまともみちも尺給ひて
（菊）ゆうとみ花よかりけるに人柳の葉と
是へよ源氏よ流れもかしかや
流しえねへく
（桃）花よかしこそまつらへ書し
（弁）ゆふの家の花よ咲かなにし事と

源の君しくさへのすて
まさいとらよかしけと須く
（桃）家の流かららハ花よめりぬひて
源ハ一句よへきてまへり源の
るよりハけいわせてハれも
いさらや
（菊）花よめもくとて身いへとつきて
まふことかきやられハ葉は給書
黄りきかとつきてぬすふと

かんとその帯はや
まきみい　如心 董こし
振袖とりまはし
如心 源の袖し
あつさきしすれり
菱 文まふるとの影や　絵
しのこりん
如心 唐小紋や
芥 唐ある小紋にし同にしをたしめのこ

うたい唐のとりおろしつかう
一巻可免
菱 しあやめの子や
すそいとふかく
菱 しらきこ
しらぬそらよ
しろよひかれてこ海ふゆくり
花のあつさや初さかまき神こ
くびやくに

蓑
雨はれたるきのふかりや
柳とぞうつりてはへるまゝつゆなりか
しいつゐ芽して
に
楊柳と白糸よりたく鴨が草
もとも青きゑよまへくらなし
に泥鼠え
雨らのしらに
に
展眉地せつすき柳え翅して柔和
のすゝるしやと

秘
柔軟の柳や　蓑
いとよるとうたしみれしと
秘
涼のつよ柳木よ紐くりとうつまて
曲直いふくとなしよ
秘
柳木や
ゑりもふくてまつす
めくしも葉の紙わさ
川流波のけしも
蓑
涼の紗の子ともそてもしてねとこ

わかくしく
ほのかなりしもすさまし
はる
ちるかの物流よりなみかくて見
ちくれともにとりくりなひて
ほりくらいし まつ文君の人をた
いとまさかくれつく佐 いきいせぬ
うや
くひねよめともあれかと
ほのかぬつまでのまつて

みきしきれぬのひく
ほのはつをいつくや
いとゆしきあつかふ
ねと隠りし色つぬ下のあつや
篆
ひとけをひしと見つてそよつ見れ
今よりつとあつんなさきゆくし
すつとくあつとや
ゆきありのしれあり
篆
ゆんは錦の衣ちやさよつまてよし

桃 明石中宮なる人かなしからやは是兼

男もうへきいとし

こなた人〈おはしまし〉いつもしきさし

園 柳原は桃もしい好ゑありし申

さとゆうそのまゝて

あかくハおハしゆ来

ゑらいしゆへもとをふとらし

ものさらいわりもあそし

川 た防とてもの海りいふとおかあと

色ぶんといのちなからへり

斧 柳原参りし男のけ宮とを吟せし

同おかしいはからんにまてい

今のまゝおもしと思ひあまへて

ぐちすさみまゝて

おさまれ御はらゝのきらいなへけ

也 せとしや

桃 ばわ柳原参り男のすまへなかい

同おかしいつのわりあひをんなりと

給しとも思ふにあはれなること
こよしと思ふらんぞいとすさみ
まじく
箋
秘の義は同じからずに同字あり
ひとつに出してもかゝれる所不審
物にこれはなをとゝなりの事也
しきなり
うちてゆかしきなり
秘
さらぬ〳〵の詞

之
川くるよしと
箋
よくこれなどの御事
いとあらしけなり
箋
源氏君の事しあはれけらいよか
らねまじや
秘
源の詞君の思はれけるいよしね
なまこゝろを思ふとたまはずぬ
うめるをといふすぎよ物なとと
川つき人すらにとぞなまいつのまゝ

花鳥の説あまりて 箋

花 むかし見し鶯の事をいふにしまき
ゆくのおもかけとはいふ宇治若菜
此ころの春との猶ふかいは柏木說
すゝくし給ひけるにはさく後
しきりや其後のみちはつきて

同 のひ事なるへきにや
其ことは前よりけれは
よし有てよりしられぬ其

かくしけふ前よりのみこゝろ
つゝきてなるへし

源 うら梅もさこそかくしことくはの
これそうしろめたくおもひけるなり

細 柏木の事は是をいふとなし
かりしろきなし

弄 うらむるも柏木事もうら梅
いは柏木事件のこゝろ見え

箋 柏の事をいかりしも並は本なし

きほよみ出る
孟子曽子大学中庸とりあはせ勘し
何
分句は何もいらぬ句の子細
うたかしこけき世といふ事や
見そしらて
寿
筆とりちらして又蓮池も
他
筆とりあはれなる又名あるとりとる
見てもまたし
養
源のいさきよく名とにかきのする

かそふ川とこゑ
又筆染てそも
私蓮の事なれそあらくし
ちいかりさつきのふ
養
られそいさきよくあそとなし
浦さのまことみてそう
月明にゆく
他
筆子池と
こみ入れつゝゐ物し

秘 源のいや一世かしね君縁とし
のかれるたまはりん
義 同じのもちふ事をいふ嗔漢葉
嗔生葉ゴ葉アリ
藤壱事葉の事清舟事なと

こいしね演する世も
秘 源のふ行ゆ道も思ひやつらにぬるに

いと川くしのふしとや
聞 源も不海道のわりとや紫よも地
今や人めふありしくれはく
またあるとや
秘 あま川くしん
紫よも盛よむ人あはさりとあり
秘 こみあかとくそ
めとこあし
かりふよわかね小すく

さりとふ足らぬものゝみさへこそ
ぬるや
色あし法とゆるしかなし
秘 柳本女房衆の花や 弁
箋 蓮らとみるは柳の糸より花ゆるか
ゆりしや みなこれよりしてさふはい
ぬれみゆらしかりしとや
大なれ見たかの今のとゝめに
秘 柳本の遺言と律へ申あさらぬれ

こゑのやや
ほのめきて 大るつうりにとしつゝ辺
株のうえれ地あうれなりに
秘 株へ川して けるかる妙し
株のうおれいるかも川のそもるか柳
弟とわさんとみえはとうりあゝかや
かよりて五の節とて川しのる面白し
梅くもえとり風にすまし
秘 楽器ともなかくし

ねさめのつゆ
むかしをしのふらんむかしへかへる秋の夜の
我はなのゆめ
文帝我は殿の由井原の勝よ
ほよもおもひつゝまて
文帝以之条家の中将
すきあけてまても
多集　万葉　潜思
むしのねのしけきのへと

藤原利基朝臣右近中将にて住侍
ける曹司の身まかりて後人もすまず
なりにけるを秋の夜ふけてものよりま
うできけるついでに見入ければ
もとありし前栽もいとしげく
あれたりけるを見てはやくそこ
にさぶらひければむかしをおもひ
やりてよめる　御春有助
君がうへし一村薄むしのねのしげき

（秘）世へとも成り出所へ那り
柳本参りも一条家と出てひまふ
ふくに一もし扇もありけるよ
もろこりて虫の鈴そらん　おそう
思ひ候ふ所とありけり会く
人のつきくし
（養）柳本参よ虫の鈴そらん　竹とつり
なめる夫を会こゝろこゝは世へと
みられつと明きらう西風

思ふほどくられて
（秘）竹のころありろう　律を
わかよろし　辞
おもひかなあくり
（辞）見川かの也流り　時雨あく
（秘）夕暮れもこそ鈴虫秋宮涼すか
をにそり
故君の川鈴り
（花）あられいともつしの　花すか鈴とは

秘
楊木はひきぬしにもの拵し
此器ハ楊木は平もめてかし
給ひしとや
茂
楊木は塀のよみや
うはことにもこうりて御覧
秘
此二はゑのはしもの下にて 楊木の
ゑおいとうり御んりや 弁
よめとてさめし隠ぬ
花
一条のこゑすゑのいくし 此二ゑの

此事らとのまゝて
秘
此息下の絹 弁 おきとさくいふら
よ御して まろ妻のわらひりて いめ
御ひきまうくさ 来りて ゆし
しとや
此隠花
自らさへい古川もさにしもの在まち
し月見てめくりきにゑ給
菅御芽鐙子朝とひく二人の
那は好もわりゝり 遠子朝死して

後今はきこしらぬ人も御はなれはよ
しかりとて御身経を語るは
ありしこと
院の御事にくりして家から
孔 秘 朱雀院の御前まての事
此この家にことなるよしいふをと
こまかにしらぬや 私
義 朱雀院も此家から御事申すに 此
二条院御事をよりし事さしめ

さて此御丞相の夕霧よ御行を之
私云 秘 同 わたくし夕霧は字なり
やしにおりあふ
よのにつきにといふやうに
ほ 浅茅生の小藻のまへして
秘 女のうきつまとなりける
引かたのかと見 私義同 此今と
仏野をとひしも柳のすゑ 私 を
思ひ川かつまとなるへしとて

物うしとはとく世二家の万り
め以死若甚分出よて申しけれ
てあられを侍とおもひれいと御恩
可世二家の御めをうけて故之
義
秘の義は聞しあさらずの小さゝ
家は此一条家のあ世らうさ海り
けて以下
いとこいりれ
秘
夕霧の詞

此そうしにあると
ゆ
いとて世中うしみちくいくさ
伊行人
としへあわい思ひ御まし　奥入
急しされわれられあふ世なり
すはつきとしめそかけいさほし
こひしきのしつきなしめてぶ
けゝさ海し　奥同
此うもなきおもひとや夕霧れ
へりしニあり　桐本をせうんよて

さゝよはゞ女二字をと思ふへあり　杏
荑川分
筆につくれは加きにゆくまし去
主の御用のつゝまりかけは嬉しさかなし
物すれは文字んすゝ佛ふれそゝや
夕暮れ錦下には落葉をかさねつゝ
とにかくし侍り
花
夕暮れの月さまにとふと諸ぬやはり侍る
八なれ松へ
花
御恩下の錦し

ここのりつゝ何ことをきくと
仙
御恩下夕暮りゆきまへとすゝめ
まへふや
吾
八楽侍情のあるも
葵
夕暮れは楊柳と紅葉の生きをしたり
器よおりうつ郊はなりはもしけり
うつね郊に含も川こへんとや
再そとされはきゝしめ
何
妙聴仙楽再暫明　以上八秘要

ちはやふる中のちとは
何　和琴中二絃や
花　夕暮初しみをわりにおりませ
うつは気ありむせしてまて
せめくるのつや
松か　夕暮朝夫妻此中なれはかれに
としてもえの此ともの秋よこそ
はるいつくゆれや　筆
柳原より出二気へつきりくまはせ

くんや中の中と又中といふんと
てや　見に候
松　志ゐてもやすれます
用をこあつさ海し
月さしゝはやしとものかぬきへ　冬りい
秋ちらすの月のつまとのまし
ねらしましくされ秋ふか
何　目覚りをねらうりむゑふ月の
すさんうみ書うか此のよの月

秋風にさそはれぬるか虫○は
よ所にはしるとも人てきこえ
秘 露乱れかゝるや蕣
花 女二宮今は独身のほかすれはなき道
箋 らしはしく落葉の宮と思へり
夕顔の巻に
此ゆふへといふことは月のうに
花 此巻はひきのまて関
秘 初めはとひきぬるうらみの歳み

箋 見えすして筆と
此ゆへとに初めて御身にこと
くしくはなきや
紅は筆の女二の宮のひきまへのに
ゆる夕顔をも海とてなかや
あるも女二の宮とてえたり
ひとつとるもせく
夕顔の初めとといみとのりより
見させれはそのまゝときてひとと

もさとまふなり
何すへんといひきまふ　河恵末意　平調
花
夕暮れ恵ま恵をいひてやかしまふ
胡しせりとよひ月まうといめ二字
の涌らんいとゆふしことくとせめまふ
いやとてとい三の曲もといむしと
かり曲りりやとくゝまふと
てせひらていひき侍らとや
小松
夕露いこと侍し　まふとや

葉
想夫恋又相府蓮説アリ
柳花苑といふ心西也や
かりしとよひ日なりも
細
夕暮早下の羽舞
葉
まとかりふと以ふのとこれくらす
すかなりすりに柳花の曲なかりし
紗のあらけらり柳やといひまて
まきへとたまふ案まてになしまし
ともかりふよつきてや

同 こゝろこしも女二の宮中を恨ミし
御かたハかほとや心ゆかせ給ふらん
ことわりせまほしくや
弟 柏木の衛門督思ひくらし出まゐり
くるしみたまふとや
御して つゝ御しき
花 出まゐらハ女のかたよりさはりもく
秘 御しき由し
拵えぬまほろしのかなし

弟 柏木のとのうへまゐ
私めしよとをさかや御して出まし
恋ひとえ
兄 とに出まゐるもらうて御さうとも
へりをうしろ御前もさうとみゆる
ほ へまゐ下川のれよに入りいきて
思ふるして御されなし
毛 かくれよき御ゆくしにおぼえいとわい
出まゐるをひきおはねくなり

秘
夕暮はいかねいといふますすつて
ことくに人なれねとや

奇
女二宮の柳の中のひとつのいとあ
ひき給ひねの中ねいひねはいふますき
かとひふみそへしいくしをしあはと
人まちらけしきさいとし

箋
川らいよ下のあり
とれ出きは柳そとかこし人よもち
ます葉しきもとまれはいひねはいらふす

海奈御山ふきのいろくさとしとはとし
女まいさと

秘
宮のすけいさや

箋
今上の女一宮の人まとおひきあて

二花
女二宮は柏木といひきて其ま真の
まいさと静川とあらし

箋
柏木とも（?）きこしあて

色落葉
つきよのあはれいきもけと
ことよみえやいらひけり

花
此二字の心なくてよみ侍るまし
おもり文字とはいとつかさねたる
斎
たゝさ此体にはあの感しかしとも
ことよりある言よいひそてハなる
あれしいろねとまさるとらふへり
ていかしとや
紹
たゝさ此体にはと感してく楽の末
けるとも色よりあのふるしと
やまと此義斎よ同し

兼
梅かさきよりあかれハ月さへし色絶
ちかきす居るつきさしさと秋風なと
此体在の感なきのあかれと上の句
いあかれいまをあししまはやすきに
ぬれとも胡まの一れぬと
紹
梅かさく色の一て　胡天蓮のくり方
此ゆかしわそてとこて
花
これもたゝまへ遊のこと
紅秋楼も打い柳花のてかれし楼

とふくうれさと拘りきくわのんしぬめ
てとらふよ
仙
うちわしきりて
夕暮めくて
すゝしさを隠まし
仙
夕暮の鵜と
養
うれいうらくきほて風流かさ
ころとし
扎さ海しひきもとい野辺色タ

暮かひさしきまよ
ひしのともやと
花
九尺堂の橋乃あらいとうあらるへき
仙
ことふて
稲荷の宮
舜
うはとこものこしくとを
養
夕暮に乾ねて真乃海もとめの
とうちうれうきれてとふて
こしくとつのまもとしてふき

明ん太りもあるへく
むきたるあまりも
これも娶をとけていふへし荷葉のうの
ともまはかりすらのはなすとく
こよひの眺をきれは人ゆへ川いく
人ゆへしきに面かとい世二毛の咄娶
もよいくしぬへくらし来をいふて
みゆかはゆへ人とてといふ月て夕
音の絲なり

草花と花薫流いつすきぬし
さとさまくみと云詞とはくら
七夜のあかれさに遊すらし
きも人ゆゑすへしと草花のこと
いりくるや
山鳥示の詞　禅閤の夕音の詞と
今夜の面白さに夕霊の樋も人ゆ
あすへしとも出へくやうし
これへきらし　私云人ゆへいと

あり花鳥のごとく夕霧の詞也のたと
とゝりてこ也のためとこいひなして
琴の緒りてなる詞し又云花と
らのと而の詞よ連歌して今按
の面白さんハ夕霧ねこりよりて
ね物の声も人ゆらすつきとすへし
流よ海きりして打とけても
夕霧ねひきぬハ也の緒ません
猶となれとやけ怖ハ意なるす

六条の也ふ猶ありあそハさぬとこそかん
とて琴をとりおとろふつきもてならし
以上弁
私云也の緒の哀花夜寒によるへ
すきくしさとさ海くうちいて
も琴線せられぬるれとり夕霧ね
ましい御忠可の也答りたるねすき
くしさいされもゆうしとてまて
ひとこし以下弁花の緒哀花志候

つきしん
そこんとゝきゝ
とことゝここともなきさいすり
秘 夕霧の羽衣こゝろよかもひ給ふ
色〻かし
哥 いかしくこゝろよかもひ給ふれわろし
夕霧の羽
秘 私は浪太子寿命の住すかよし
秘 御息不の羽し黄に為了見よう

まのさくきん
何 ひとまとゝこころみさにかりけて
あらしにちにたをまのなにをし
秘 川が周し唯太るるの法所彼のし
そてくの種のあつかれをいとかき
ころも給すれわうとや
哥 ひとまとの分よれし也
あん事すていめひさしれのこ
目か関しとや

私云も先頭のことし此女は秘華也
前加遍のこ先頭の須きを見へし給ふに
引きよ及はさるへし
秘 佐藤くりおよ第をとくへう
別よとくりおおうれをくしくうへ
つし　花
これより海にれわうきま事も
秘 佛恩河の飛前よりよ多音は観音也琴
まもい義つまて侍るへうしもありこと

ちる道しけくうり
箋 此巻は東山此第の所事をも深の給
ことしや陽成院より侍りよるよしき
かれちとをしくし女房の給え
人も似合ねつーとよれはいつりしあそ
のまへり
た 向丹遍山陽旧居恩秘山康関陳人
嗚篭作恩化賦
打ちかりもきまふる

花
莚まのやしにうつりなかほうて
ちりとや
はさへよさ風らんこゑかり
は
いまれ節の竹の葉のさゝの都よ
あつさふくきといふてき風ふいあつ
みふて
秘
みさとの都のりあつさひて節のこ
色のせんとき海かりきとし　斉養
うり道しつね随身

花
はるゑのこゑとゝろくも雨のはなすつる
てかわりね随身といふ今のまのまゑ
節もと随身してまくらへ
秘
さとのこゑとのまふりつゝて随
身といふ身にさそふつゝきも
あやとや　養斉
よとそしに身にかへて
秘
拙木は秘花せし拙そとし
養
前の私娶り対してこれもけ

又云

こしきの曲には

おほ楽の譜のうちに事もなき

ひきもの

笙は器の音のかすかとのこりたる

吹つさす事ハかなしいと柳のこゑしを

かもりん合けてしかと

箏とよく吹そて挑へすへよ笙

をも調しけれどもいひしや

らんしやうてかくしつら

盤渉調　かうはりは盤渉の調子

なりけし

ものうと申すひゝきとこそもつ事か

されはこそ言はゝ事く

ひらうと云琴にたへてさしまは

おもていしも楽の譜の事の音あり

こひらんまんやまと

かなしとひきし事ハゆうされ給ふ

此笛の称ハえ次と號されけるとし

(寄)柳木の名ハしかとまいゆかし

柳木と思ふよりて松風ひらし

竹ハゆかされ給し此笛とはなく

てりいかなとし

(由緒)鳥之けきむらすれ宿にいあしくれ

秋りのうねむしの声うか

(寄)御息所の子　(秘)笛と出にかして

よみかねし八雲めし宮もの世まくら

(花)出の声より笛の音をとゞまりし

八雲作れもしいれ侍り

文選笛賦云蜂蝶閑流音搖積

(ちくおん)まとゆめのちくハもしれからねもしる

しく成し猶そはきそね

(江)横笛一声天地秋

(寄)柳木ずもとむらしく成しとこ

(秘)柳木の不所の名都ハ為をいしとて遠

うしとや

笛は中の穴座なりこれをと穴し
くなしといふへき音にて書ければ
いふ夕暮の秋のとかや
花 国史云仁明天皇承和元年正月辛
未内宴於仁寿殿是夕初授正六
位上大戸首清上外従五位下清上
能吹横笛故預此恩奨
今案横笛二字の和名をもふへしく
詞は秋は笛の調よりふるく 秋を

うらぶれや
山ざとなりけり
夕暮の荻葉をわたるふえし雲
井尻は一人つけゝる
秋ふく風しみて
雲井の尻く
いはしぬといふさの山のと 偲る子し
いはぬとふきの雲のやわらく
まそなとりすゑのやうか海さら

しにやらく浪さわかれや 信ある尓兄妹ら秋

芳
見河海いつも袖とうるふんぬる

秋云出と雲井の月の下波られ

いつも袖よりふとうるふりや 図

蒙
夕暮と雲ゐの月の雁とこし

すのいつ花紫くしらく

こよひの月をともねさとも

芳
里とうけ拜掃し

桃
里もしらぬ拜掃之人とさへとはんとも

いひくは優めきさえんへし

らしむらくふらしぬるらり

かえりあはぬへし

わかる秋の月よつやすく

桃 芳 蒙 以の川な年月

巧右
くいろりかしとそふ秋もとほつまよ

将くあしすらん人さへそらしに

やすしのひのまよ

蒙
やすさつねつてあや

君かためいつけするく
秘 夕暮の浪まくらかや
わすつ示のさ海
秘 一葉落や
うつ笛とちふ吹
をくり物の笛し
いかゝ匹こ二君
秘 梅本のつゐもいはゆはうれしさとり
梅本の廿二日あそとあいしらひあかし

梅をとりて
見ねとりせん業しこそ
秘 むかしてはいかとかり
笑 はるさちの末まともとし夕暮も落
葉とみそめてしは梅本の御より
もしくしくあらもあしとや
秘 あさは世にたつけても
世界百のくれよに地
笑 かさりあくやめてみねらりすのゆ

もかりとや

鶯
大かたの世につあてもとい世かたは
いひ悔しこゝろのは聞てあとなか
なき事はなきりのくされは落葉の
流ることちすゝむねとやすくなくは
なきわかれとや

ころ流中の

弁
雲の林と夕暮との中し
かへりゆくひとへらも

弁
夕暮れ定めりてこの別らぬの
おい又別のなかさりもちて雲
井馬のかへりえしすゝらかれの
あらとら

桃
おもひなき事すゝれよ仁様のあつ
きとも雲の傍にあら海しきゝのこ
えんけ流へらし

桃
すゝし林ゆり流へらぬ葉に
夕暮れ言ゆや

あらしかしハちきにつる
柏木病中對面のさいし
夢のうちにも
夕霧ハ夢にて
うつりしう
秘 夕霧ハゆて
笛の音のとゝろまてと夢にみえて
夢中ニ柏木ノ言
笛竹よ吹よる風のことならハ末の世
なかきねにつたへなむ

花
此歌の夢中にゆめのえしかるより
之ふきよしに傳へよとハ女二宮殿
うしろなくとものこゝろにや
秘
夢中柏木のあしけ之てハしく
風よりくるハ地からいふるかりふる
へ傳へつれとや
笛
風とハ思ひて吹ゆへ之なか風こと
かいとハ音律ハみな声ハ絶よ付
ニ笛吹傳かの之そのことしなかれ

わかつる人とゐ葉よ川く人もとこ
書のなかれいのぬす御人とも
浮舟之人き御事なりやとふる
こしに花鳥よ女二の宮とあり
不足也
之ふるこしに
秘
花鳥女二の宮の事ときあり
義
されともつしらに方はあるとみて
とりみとこふ得とか

そのはてんとまうかりし夕暮のとりん
とかりふく
うきみいつもまさりてひとつ事
夕暮の暮もと浦しうきみて
うみをとしつらへい
花
哯和名 哯吐（ツダミ） 小児口哺乳冷餇不消
旺ほや
秘
今案小児の乳をつまとむ事しき
哯吐 哯唐韻胡典切 小児歐乳也又

不觀所吐

しもはるかなる
雲ゐの雁や
見てなさしして
新 聲さと耳よたゝきみてもやしやしき
さ海に雲井の雁かね
いとゆきて
雲井雁や
はるかいとこゆるかと

新 氣のいろあさ付し 秘
ら海うしろうそしして
義 敬末の実し 多細布すし
大聲念にもあるめし
なやましあにまそられ
秘 雲ゐの雁の網
ゆまめしきはあるさ海の
義 荷葉の米をとりてさ海しよかし
らなしまつし

しらゆひく
夕暮はさ海や
あやしの地の物うくや
夕暮は頼し
はなの嶋つく地獄して
子ねかやよみつまりしらおおねおろ里
くろと雫しろ風しにの移て
はなあまひ孫
似
雲井の鳥頼し

むさとしらぬ狐と火いさやうなれど
もゆをにちこてうねまて
海とにみの思ふ川こてむ川ら
ゆたかん
頼へ　万葉
海とにかれなろくひまふ
冬
柳あの夢にまかしよ川く
行とかるかをれしまつて
んのこうろとしめて
冬
んの桃とうかしろ地いつへんのちかつて

おしき事あらし
さてこれは世の方よりは伝わ侍な
此は柳木のかなかりなんとや
何の今のみとどかに
秘 涼往は一念より生処は定なといへり
なきにはずなし
秘 柳木は華も此不より流人の華不
なれとや
蓑 とらぬ

ロ とらぬかは閑眼の時なや　涼往一念生
処是定往文
貫之集云世中は何かかはりて
常なるらんとさりける涼云忠躬が
許よりあるとかんよまてとくりける
あはさにとよ病とめくかりて
しあしくかりよそり
まれじまよ水よろ田にる月けの
あるつまき何の世にてありける一

返しせんとおもひしもせねかれとよ
うせよそれはきこえたとろきてあ
たれかりてかのとらうるは返
しにくゝて今さらに誦経さ
せて河原よりてやうせけるとそ
みかのこゝろよせはちゝめも

義
栢木のかりして御修のちなかくし

秘
於仕太臣家はちなかくし供養なな
これ明と為のし無にあり

あらまほしりゆふけのみちよ

秘
係んに旅せんもなうとや

義
誦経の布施よりと思ふともろ
物しみ人の銚あらてはくらせよ
おなれはそれも左理りなり海
ことこ

花
康保元年七月村上天皇云七聖忌小
野宮被修諷誦和琴横笛不為布
僧布施菩云位諷誦第云有一説経

蓋希代ゝ名物也とて
六条院より　夕霧源へまゐるや
女御の御はらより
秋 明石女御や　季
六条ゝ川りいりて
秋 匂宮や
花 六条ハ匂宮夫婦し女御の御はらより
ましはとと
六条ゝふさまよりはそて

秋 紫ふや
季 六条匂宮紫上の女一宮とも六条とし
桐壺ゆりかゝりの
夕霧紫上のゆふくれにまゐるく
秋 大君にて
六条大君ともしくのかたみ之　季
宮川にさてそまより
六条の秋よのかたみ
かへさへかそれとせ

花
あかしは入道家の北方とし申田丈
西對に住しましひや
花ちるは源の中将のはゝうへまし
ますかうして夕霧の業上の月へ
まりまへ二条のいまだて女御の君
は源のおほいんめのまへとの御ん
花散里の舞かり
しらかしこゆりて
明
二条にすゝしかしこゆりまる

紫
紫の上は二条とうしけりけり
のおもと
うしなひてかりしませ
夕霧のさ海詞
みとのまへをいまさらん
明
紫上の方に住まんや
いときなかりしかん
夕
夕霧の北おもとまさらんまさ海あし
よの給へ惟しかなくとや
一

まつはくさん

菩 種と云ハかいくさんの吉方に在て
かうしんすといふ也 わきさまとり
種と

秘 大ねのはとなのうね風よなく
さんとや 菩
秘葉の葉なり秘菩に葉ぬへし

二葉ともに
秘 明石の女御に御方（まうりてのこ）

二葉の内の君とはいひけり
何 二葉ハ今上御子蜻蛉巻にありて
若君ハ薫大将
花 此歌ハ君のはゝの御こと入道の家の
御方より二葉とおもひます
菩 六条院ろくの方紫上南のうへ殿
女三宮ハ中の宮の君明石女御
の御方まそれの御方まその返し 秘
すみの事なかとよ

花 たね三春といふたまいらせてすみの
まの田にしすへてまつたね
わらたねをやとて
白菊の秋たねとおのみかな
流も流絶して 海く花の我とへの明る
花あやけの流むれ海となりをと
千鳥たねとし流男も千鳥の鏡当ゟし
松 見てふれ流男とよふり
おりしんうれさ海し灯かの陳なり

ふう散剃ず人さ中見てうり
こゝろにきなりや
芭 二葉れ流了ともいさふゆかまで飛らし
是田見なの門り下さり
二葉らは御月経のあかとや杖ある
しきさりてゆうう かさむすき人れ
のりしこきともふれへし二葉のう之
ちゑとて 松 深や 芭
志のれ流をはあり

秘
源氏夕霧のまくらとの歌ふ事　へ
いろ歌いへと
秘
源氏紫の上のさくら歌いへと也事
ゑのうら君に
秘
葦て
花
源の氏まやこゑのうら君し事
箋
源の須や中やすと天皇の漢字されい
ゑうらと并のちいさまし　こゑ
と知らして見そなし歌いて柳木の

中ゆくそとやらの浪の心かすやかすれ
歌りんとけらめふくありしらひ歌之
秘源の浪孫ゑうらの御にいきかし
くいき御しきやされいやこのかとも
いとめ歌乙もけらかれく
いとかしこまとりふし也

け君もとよくもうぬりると
葦の中しく夕霧の中まらしょうね

とや
二あゐのなほしのゆかり
に二藍　直衣
にきりとをてとはかさねきしへして
衣裳をとはぬさすへて黒衣はり
とこてといふこ黄之けり　なほより
侍し
花たされきこりのきうとる細し
とふこゆう二氏つりれとれの

由や
にはゆよ尺てらう
峰同之ゆう二条てのゆしゆ一巻
なさなきさとらのなほし　い指貴
ひくるといさ深してちいさく
いかれへくりのと小袖の御よ
きすりやかきりとらふ家ゝらしと
もふをしらを見せぬくて
なまめと御ゆう

秘 夕霧に柏木は車をとゞめさせて
みぎはへよりし歩
秘 まれこねむると
眠中や
蓑 又眠なをとけるよ
今すこし川より
薫は柏木よりも眠よ粘のあつし
いとよろしかるべしまへり
荻 柏木の見川きよ　紙ころといふて

ねとハなりけす
源の薫の柏木より紙ころゝとかゝし
とつめんとや
もしろきふゆこそも
柏木の車ゝと雅意にそふす
ちゝねとゝへさつり
秘 設位人に
よれのうへぬらるか
の ゑをし

いたはりて
秘
夕顔はつまらもとなかふかし　哥
のこんはん
ほふのやとりしとや
秘
あはんとりなかれは
紫上の御方や　哥
よみの一条家
秘
夕顔源へ御をくりあらし
かし忍して

秘
夕顔はまきつくともひまあてし
むしは年
秘
かるうきいしよふかゝり　哥
かの御しかまえのふちへは
花
花は源氏より夕顔は一条の家より
その実綿りなつり世二家のさ
しかまえのまへのことつけはしの
ともなりきこゆあらやされと
源氏の批判しのなつて起ま恋ふと

さしほどの月こそあつてこそおもはまし
恋せぬ身のつゆ
似心
涼の浪も海よしにあたれとなく
さおもしろ年かりしとや
舟
涼の縁もいかしくの方しみもとに
おもふ恋のつりや哀なれくきおもう
かりしとかり　おもふ恋の中まとや
いかしへの年とおもへり
めいすると人のいつより川なかつりの

落葉のおもふ恋のさのえつもいさ
流れねよりにおとれつまと涼の水は
すゐて
ーーー
すまひゐるならひさしきとこれをも
似心
夕暮とし　つゆ涼のゆきふ
猶し　舟
人ほこれぬどかしい
これぬいまさんねし　舟やこれ
くるとかしらや

おもしろいつゞきよろしくて
（義）柳本の遺言りきくしとの後
衆多人の意外は風流にて詠
なりて志かくへしとや
作しんのうへは此趣をしつらいは
（花）花は夕暮にもまつの之さしは
さようしや源氏の人のうへはふ
何もうしくさは詠へとも作者
あのまゝいさゝもなきによしや

（秋）夕暮はへ申し源の作者はくまて
さいあつ哀しきとし
何かみられ侍りし作つるかぬ世の
あはれと
（秋）夕暮は詠や古る世かしぬあはれ
まことうつひや中ゆうたとくえ
してとに中孫をしていとや
ふうしかく侍りしてちゝくよの事
のこしさありほり

花
山端はしらぬ雲まを
忘れすくなりき月きよき昔と
見ぬもろこしのみやことゝひ
秘
今さらしかしい情有人もとむ
つきとや
巻
しんぎ　短歌　ゆいをさし
ふかのや　蓑閑
如
御ふまへつきしをそ
夕暮れすゝめなひしよりてひ

夜深ひとりの声はかなしぬ
年とし
菊
らじうしきみ成てそておわさ
つゝいつとや人しよう年り
よりさうとふしとや
よひなしもつしいさし見しびかと
も柳し成乞す
巻
花葉の寿齢の年し人てのあり
さ海なとしとも夕暮れ中のまて

秋 年のほとも よそこけれは物いさ
よくさしをても くるしくは
有るのとや
みわされ海しすましきけ
しけり
秋 けふも宮はかりしよりて行
海しすしなつかとや
秋萩葉の院もうかとせむの
宮くしきゆへけり風は

さしひくとも旅泊海しらし
すしるかきしみ秋夕暮の宮は
あそ風流のねなしつまし
しまふとけるとりすくしけ女
萩なみ行潮のつきに萩葉の宮は
あらしにてたつらつきしれ
秋 夕暮れのくやされらいめこのつゆの
ちとせふかしねつしよかむひてく
いつて

すゑひろく海山かけてその葉かつらを
（も）すゑひろくましてよろつ代は多分れ
源氏の御弟ひろくあまねくまもりて
一条院長阿の子とてあやし　弟を
頼清柳本乃葉山見えてる
なをもみてそのをとこしれ
（秘）ますみ
かの葉弟のこのみ
（義）源の
あのしあらす

（秘）源氏弟をとこひのかて
其の弟にこそ見えける
（花）花より源氏のこころのまへ細し
加賀ハ陽成院の御弟にしてあれとも（宗）
（に）此ものハ家経ハ手陽成院の御傳と
かねて清盛のよろしくれハ元　長親
王ニ京或ハ（母王氏）元利親王（母同）京或ハ　女人
聞え但此ハ　後醍院の名誉不関
かゝる南流或ハ　負保親王

申しけれは大日經行して長谷陽成院
御弟や色有其寄して見えけれは或人
てありけるは權舟院父桐壺御門御弟
申しけれは貞保親王に擬えられし
花
南宮成人て貞保親王は節く道
薦也清和に御子母二条后陽成院
と御弟也それと紫上の父式部
卿宮をもつくしてうにくる こゝ
ゆへありとのまゝし

似
桃園なるへし 花鳥余情に父とこそ
見ゆれ紫上の父は中務卿とは
所成人ていはれまし きこし
弟
貞保親王の子孫也 桃園式部卿と
薦の宮ありし しとも貞保
たへてのまゝし 清和院いつくしめし
其しみこ比陽成院 有桃園を遺し
花
壹ヲ成人て紫文有段に但莚この
ありつ

箋
文帝乃戒部に紫に文をもて消す
事あきらかに打返し

萩のえし
に
式部は家萩宴事して勤
夢
桃園りして宴有シト意得へし

めくりふるもなとりさかす
御息所の母后よきほとの宣旨と
もありけるしきとりまへる
と源の物語とや
秘
東の世の川とは又川つらにそわい
源のいや
も、
常中の名り藤竹よ吹きり風
のとかい東のよせうきし打り
つらみんとあるよし事し

同　涼のいまは山路と萱ふくよして
かほをとなり
こゝろもはえりあるき
秘　夕暮は此ころあるへしと涼
の梢しまて
その比ならしはきぬしける
花　荒ちらは夕暮なくて
とみもうら出きこて枕のねと
養　夕暮は萱の宿となかれし

ちるすしてといますと涼のかほと
鶏鳴のあらしに帰りてとみけり
しえのいまねとや
せあてきみせてもひんの
養　ちあそといふてし柳の夕暮に出
ともしらぬと
いましもこその川のそてり
花　夕暮帯の寺とこその流る地獅
松ふかはめしてよそかして毎

しかに中納言にしての御ゆるし来
門督の今はのきはによめりける
せし事とも源氏よりは中納言
秘 箋 今かはひくらんやみて中納言
第をかきつめそてそとや
秘 今はとてもかくしに
柏木続雲久みまりみとこ
ひすの柏木巻にみえてり
されはよやと明そと
花 源の心

秘 源のいやされはよ夕霧はさる給る
よとや 義同
さるいのらしみと傷つりのめなきの
秘 源の詞
弄 夕霧の詞 柏源の詞し 此上弄
されはまつしにかの夢は
花 かの夢はかりしひあはせてきこゆ色さ
とは笛の事とのれひとく夕霧れ
ことは中ありのとゆいさはく とも

いくるとや
しかしすとつ
河 孫真人云 求美不須読
めの何くとも美成ほしきゝ児女子
侍る中の下かゝし
弄 孫真人 凡何事 又此文ありすとも
て海しくかなしけれとて
秘 とそとふ文例の作者の筆作に
弄 紫式部の作とみせしとや

源氏の海いくへかしきあらむ
又書の中出あるといふ心かをと
ふかき思慮の事也

国立公文書館
National Archives of Japan

昌平坂學問所

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan